

---

# 『私』と私

銀翼の梟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『私』と私

### 【Nコード】

N4765S

### 【作者名】

銀翼の梟

### 【あらすじ】

『自分とそっくりの容姿を持つ者　ドッペルゲンガーを見たら死んでしまう』　都市伝説を題材にした作品。

季刊誌「月雲」2010年7月号

「……もう朝か」

朝日の暖かさに包まれ、私は目が覚めた。目覚まし時計の音は聞こえなかったが、きつといつもの起床時間だ。

「はあ、今日小テストなんだよなあ……憂鬱」

父も母も仕事に出かけてるだろうから、一階のリビングではきつといつものように姉が朝食を作って待っているのだろう。私は、いつものように顔を洗い、いつものように着替え、いつものように階段を下りて行き、

「……あら？ どうしたの？」

いつもとは違う怪訝な顔をされた。どうしたのも何も、いつものように朝ご飯を食べるため以外に何の用があるというのか。

「忘れ物したの？ よかったわね、早く登校してて」

「はあ？」

訳が分からない。姉の認識では私は既に家を出て、でも忘れ物をしたから戻ってきたと言う事になっているのだろう。しかし、私はたった今起きたばかりだ。無論朝食だってまだ食べていない。

「早く朝ご飯作ってよ。お腹空いて死にそうなんだけど」

「はあ？ 何言ってるの、三十分前に食べたばかりでしょ？」

「はあ？」

……頭が痛い。姉といつしよに病院に行った方がいいのではないだろうか。無論姉は脳外科に。

『私』と私

「…………どうなってるのよ」

渋谷と言った感じで姉が作ってくれた朝食を食べながら思案に耽る。姉が嘘を言っているようには見えないのだが、そう考えると私はこの世に二人存在する事になってしまふ。そんな事がありえるわけ…………あ。

「ねえお姉ちゃん、ドツペルゲンガーの話知ってる？」

昔、実<sup>まじ</sup>しやかに流れた都市伝説の一つに、『自分とそっくりの容姿を持つ者　ドツペルゲンガーを見たら死んでしまふ』、と言うものがある。たかだか都市伝説だろうとその時はバカにしたのだが…………

「ドツペルゲンガー？　懐かしいわね、それがどうしたの？」

「お姉ちゃんが最初に見たのって、私のドツペルゲンガーだったんじゃない？」

「まさか…………そんな事あるわけないでしょ、あれはあくまで噂。実際にあるわけないじゃない」

それじゃ、私が嘘をついているとでも言うのか。そう尋ねると姉は事もなしにこくりと頷いた。曰く、私は確かにあなたに朝食を作つて玄関から送り出したのだから、あなたが嘘をついているとしか考えられない、と言うのである。なんとという自分を正当化した言い分であろうか。

「でも…………あなたが嘘をついてないとしたら、それしかあり得なさそうね。そもそもそんな嘘つくメリットもないし」

「そう言う事。…………ごちそうさま、それじゃ行ってくるわ」

朝食をもう一度作り直す間のロス、加えていつもよりお喋りをした事で食べる速度も遅くなり、気がつけば登校時間はかなりギリギリになっていた。

「あ、ちよつと」

かばんを持って今まさに玄関から出ようとする私を引き止める姉。この忙しいのに何用だろうか。

「あんたが嘘つく原因だけどね、考えついたわ」

「何よ？」

「朝食が美味しすぎてもう一回食べたくなつたから戻ってきた、なんてね。それじゃ、いつてらっしゃい」

……私の貴重な三十秒を返せ。

「ごめんなさい」

まあその三十秒があつても、十五分の遅刻を埋め合わせるには十分ではなくて。とりあえず謝るしかないので教師に頭を下げたが、帰つて来た言葉は至極意外なものだった。

「ん？ 何謝つてるんだ。それより気分はもういいのか？」

「……へ？」

「よくなつたならさっさと席につけ、授業始めるぞ」

「あ……はい」

釈然としないものを抱えて席につくと、隣に座ってる友人が喋りかけて来る。

「気分悪いって言つてたの、治つた？」

「え？ あー……うん、もう大丈夫」

「そっかー、それはよかつた。学校来るなり青ざめた顔で教室出て行くから何があつたのかと思つたよ」

「それって何時頃分かる？」

「あんたが学校来てからすぐにチャイムが鳴つたから、大体十五分前。……って、自分でした事だから自分で分かるでしょ？」

「うん、そうなんだけどね……」

仮病を使つたのかそれとも本当に気分が悪かつたのかは分からないが、ともかく『もう一人の私』は普段の私と同じように学校に登校してきたらしい。と言う事は、このまま行けばいずれどこかで遭遇する事もあるのだろう。

(……………つてそれまじくはない!?)

ドツペルゲンガーを見たら死んでしまう

本来なら一笑に伏すはずのこのフレーズが、にわかには現実味を帯びて来る。何としても出会わないようにしないとイケない。そうしなければ……………

「……………ねえちよつと、まだ顔青いよ? 保健室にいた方がいいんじゃない?」

「えっ? だ、大丈夫、平気だつて」

「それならいいけど……………ほら、授業始まつてるよ」

「あ、ありがとう」

いつ訪れるか分からないその時に怯えつつ、私は教科書とノートを机の上に広げ、

「はい、それじゃ予告してた小テスト始めるぞー」

「ふえっ!?!」

……………最悪だ。すっかり忘れてた。

「やれやれ……………」

昼休み、学食で憂鬱な気分になりながらきつねうどんを啜る。

小テストはもちろん玉砕。ただでさえあの教科はテストが難しいのに、貴重な平常点が下がってしまうに違いない。

「それにしても……………」

授業の合間の休み時間に、少なくとも五回はこんな事を聞かれた。いつの間に教室に戻って来てたの、と。ある時は廊下で。またある時はトイレで。ひどい時は運動場で見かけたというこれらの事柄を、全てごまかす必要があった私の苦勞は是非とも察していただきたい。

「まあうるうるしてるなら、教室にいれば出会う可能性はな……………ッ!?!」

驚愕と同時に噎せてしまったが、そんな事はどうでもいい。ふと目に入った、たった今学食を出て行った女子学生。位置の関係で横顔しか見えなかったが、その顔はまるで鏡を見ているかのように私と瓜二つ。タイミングからしてあと八分、私が早くここに来ていれば、鉢合わせしていた可能性も十二分にある。

「……今の、ひよつとして」

すぐさま残ったうどんを平らげ後を追ってみるが、すぐに行方は掴めなくなった。残念と思う気持ちと同時に、何やってるんだ自分という気持ちが浮かんできてくる。見たら死ぬと言われている存在に自ら会おうとするのは、自殺志願者が死にたがっているソレと何ら変わらない事ではないか。

「いけない、午後の授業始まっちゃう」

気がつけば昼休み終了のチャイムが鳴るまであと数秒。次の授業の教師は規則には厳しい、例え一秒遅れようが遅刻として扱うだろう。朝と違ってもし教室にもう一人の私がいたとしても、それは私にとって何らアドバンテージとなるものではない。

「……はあ」

「……今日は、散々な日だ。」

「ふー、やーつと終わったー」

ようやく一日の授業が終わる。どうやら学校内では合わずに済みそうだとほっとして教室を出ようとした私に、後ろから声がかかる。

「あれ、何でまだいるの？」

「えっ、いたら悪い？」

「いや、そうじゃないけど……四分前に帰ったばかりじゃない。忘れ物でもした？」

次の瞬間にはもう、全速力で教室を飛び出していた。四分前なら追いつく事は不可能ではない。今回は下校ルートも熟知しているか

ら探す必要がない上に、相手はきつと談笑しながら歩いているはず。もちろん自分がどんなに愚かな行為をしているのかは頭で理解していたが、好奇心という何物よりも強い力が、私の体を動かしている。(絶対に追いついて、その正体を押んでやるわ!!)

校門を出て右に曲がり、三つ目の十字路を左に折れ、その先の三叉路を右へ曲がると、果たしてそこにはいつも見慣れた二人の友人がいた。後ろから声をかけると、彼女達は驚いた様子を見せる。

「あ、あれ、さっき前に走って行ったのに、何で後ろから……?」

「それ、何分くらい前!？」

「に、二分くらい前だけど……って、あつ、ちよつと!？」

距離は二分縮まった。しかし追いつくまでには至っていない。走れど走れど追いつけないと言う事は、相手も走っている事を意味している。だが、何のために。

「もしかしたら……」

ドッペルゲンガーじゃないのではないか? そんな考えが私の脳内にふとよぎった。そうでなければ私から遠ざかる意味は全くない。むしろ、こちらに接近するような動きを見せるはず。それなのに彼女の行動はまるで私を避けるようなものばかり。

抱いた疑問は確信へと変わり、そして私は決意する。

「絶対に、逃がさない!!」

……私の偽者、その面を絶対に見てやる。

「も、もう……どこ行ったのよ……」

しかし、夕方になり、その陽が西へ沈みかけてもなお、私は彼女を見つげ出す事ができなかった。逃げられてしまったのはちよつと悔しいが、過ぎた事は仕方ない。

「ただいま……」

観念して家に帰り着くと、そこには顔を引き攣らせている姉の姿



があった。何やらこちらの顔と階段の上の方とを行き来している。

「……………？ どうしたの？」

「え、えっと……………あれ？ 今帰ってきて自分の部屋に戻ったはずじゃないの……………」

その姉の言葉で、私は全てを理解した。散々探し回った私の偽者は、ご丁寧にも私の部屋ににいるというのだ。『灯台もと暗し』とはまさにこの事だろう。

「……………そう。ありがとう、お姉ちゃん」

「ありがとうって、えっ、ちよっと!？」

姉の言葉を背中越しに感じながら、私は階段を上がって行く。

ずっと会いたかった鬼ごっここの相手にもうすぐ会えると思うと、不思議と気持ちが高揚する。

「もう、逃がさないわ」

……………ドアノブに手をかけた私の顔には、笑みが浮かんでいた。

「すう……………」

果たしてそこには、ベットの中で寝息を立ててる女性の姿があった。疲れ果てて眠ってしまったのだろう、何とも呑気なものである。

「……………やれやれ、起きなさいよ」

乱暴に体を揺すってやると、彼女はぱちりと目を覚まし、そしてこちらを顔を見やる。その顔に浮かぶ表情は……………衝撃。

「ほら、そんな顔してないで何とか言ってみなさいよ」

しかし、私がそう言い終わる前に彼女の表情はみるみる崩れて行き……………そして、そのまま動かなくなった。

「えっ？ ちよ、ちよっとあんた、どうし……………ッ」

再び起こそうとして手を触れた彼女の体は、冷たかった。一瞬で死んでしまったと言うのか？ でも何で……………

「……ああ、そっか」

……その瞬間、私は全てを理解した。

私が、『もう一人の彼女』ドッペルゲンガーだったんだ、と

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4765s/>

---

『私』と私

2011年4月16日11時11分発行